

## 第2学年国語科学習指導案

### 1 単元名 随筆1 徒然草「家居のつきづきしく」(教科書……『古典』東京書籍)

#### 2 単元目標

##### 《情意面》(向上目標)

筆者の美意識を読みとることによって、現代に通底するもの、また古文特有のものを見方を理解しようとする。

家屋の建造と主人の価値観との間に深い相関関係を見出す筆者の視点を理解することによって、自分のものの感じ方・考え方の幅を広げようとする。

##### 《知識・理解・技能面》

文語文法をふまえながら、正確に内容を読み取ることができるようになる。

本文の対比の構造を的確に掌握し、筆者の価値観の特徴を理解することができるようになる。

#### 3 単元設定の意図

##### 《生徒観》

生徒は「国語総合」で古文の基礎的な事項についての学習は完了しており、個人差はあるものの、古文読解の基礎力は概ね身につけているものと考えられる。学習活動に真摯に取り組む生徒が大半を占め、授業は円滑に展開することが多い反面、古文学習を進学受験対策の一環とのみとらえている生徒がいることも否めない。人間洞察に優れた筆者特有の視点に触れることで、自己の見方・考え方を広げるとともに、古文を読むことそのものの楽しさをも味わわせたい。

##### 《教材観》

家屋の外観とそこに住む人の人間性とを関連づけて言及した本文は、住居論と言うよりも人物論としての意味合いを強く持っている。世を無常の世界と了解しながらも、人の営みに興味を抱いてしまう作者の好奇心・探求心の旺盛さをも感じさせる内容である。作者の美意識は、華美で人為的なものを遠ざけ、古風で自然なものへと傾倒している。そのような家屋を持つ人こそ身分教養のある「よき人」であり、武士が権勢を誇る鎌倉末期において、作者が古代貴族社会に強い憧憬を抱いていたことが伺える。後半の挿話は、「よき人」の代表格である二人の貴族の共通した行為を並べながら、西行と作者との対応の違いについて述べられている。西行の性急な判断に違和感を感じる作者は、人間洞察において、より慎重で思索的だったと見ることもできよう。

本文には、無常観と貴族社会への憧憬、さらには人間に対する旺盛な好奇心という、徒然草の骨格をなす三つの要素が織り込まれている。徒然草の全体像を理解する上で格好の教材であるとともに、明確な対比構造で構成された文章は、読解力の養成にもつながるものである。更には家屋の外観から、住人の価値観を洞察しようとする視点は、生徒に人間観察のおもしろさをも喚起するであろう。

##### 《指導観》

簡潔で洗練された文章を手がかりに、古文の読解力を高めるとともに、作者のものの見方や感じ方、人間観などを理解させたい。また、『徒然草』の現代的意義を考えることを通して、生徒自身の人生観・人間観を深めるとともに、思考力や感受性を育てたい。

#### 4 評価規準

	関心・意欲・態度	読む力	知識・理解
題材・単元 の評価規準	・古典の文章を、表現に即して読み味わうことを通して、ものの見方、感じ方、考え方を広げたり深めたりしようとしている。	・文章の内容を叙述に即して的確に読み取っている。 ・文章を読んで、構成を確かめている。 ・文章を読んで、ものの見方、感じ方、考え方を広げたり深めたりしている。	・文や文章の組み立て、語句の意味、用法及び表記の仕方などを理解し、語彙を豊かに身に付けている。 ・文語のきまりなどについて理解している。

学習活動における具体の評価規準	表現に即して読み味わうことを通して、作者の考えを理解し、自己のものの見方、感じ方、考え方を広げ、深めようとしている。	語彙力・文法力を手がかりに、文章の内容を的確に読み取ることができる。文章の対比関係を確かめ整理することができる。文章を読んで、ものの見方、感じ方、考え方を広げたり深めたりすることができる。	文構造、文章構成を理解している。語句の意味、用法及び慣用的表現などを理解し、語彙を豊かにしている。助詞・助動詞の意味・用法について理解している。
-----------------	--	--	--

## 5 学習計画（指導と評価の計画）

時間	各時間の目標	学習内容 学習活動	評価規準		評価方法
			関	読	
1 時	・「家居のつきづきしく」第1～3段落を読んで、家居に対する作者の美意識と、人間観を理解する。	・歴史的仮名遣いなどに注意しながら音読する。 ・助詞・助動詞・重要古語に注意しながら第1～3段落を現代語訳する。 ・家居に対する二種の有り様の特色を分類・整理し、作者の美意識・価値観を把握する。			行動の観察 事前学習ワークシートの記述の点検・検証
2 時	・「家居のつきづきしく」第4段落を読んで、西行と作者との対応の差異を理解し、作者の人間観について考察する。	・助詞・助動詞・重要古語に注意しながら第4段落を現代語訳する。 ・家居の有り様から主人を理解する際の、西行と作者との共通点・相違点を把握する。 ・作者の人生観・人間観について考察する。			行動の観察 事前学習ワークシートの記述の点検・検証

## 6 各時間の指導と評価の実際

〔第1時〕

### (1) 主眼・ねらい

「家居のつきづきしく」第1～3段落を読んで、家居に対する作者の美意識と、人間観を理解する。

### (2) 準備

「家居のつきづきしく」を音読し、事前学習ワークシートを活用し、第1～3段落を現代語訳して授業に臨むよう指示しておく。

### (3) 学習課程

学習内容・学習活動	予想される学習者の反応	教師の支援
・歴史的仮名遣いなどに注	・不適切な語句の切り方を	・音読に躓いた生徒には、品詞分

<p>意しながら全文を音読する。(一人一文ずつの交替読み)</p>	<p>「えならぬ調度」「さてもやは」「何かは苦しかるべき」等</p>	<p>解に留意させ、意味の上からどこで切るのが適切か助言する。          ・漢字の読みとして留意すべきものを指摘する。          「簀子」「透垣」「前栽」「大臣」</p>
<p>・第1～3段落を現代語訳する。</p>	<p>・「仮の宿り」と表現する背景が十分に理解できない。          ・「今めかしく、きららかならねど」の打消の助動詞「ず」を前句に掛けずに訳す。          ・「唐の、大和の」が「調度ども」に掛かることを理解せずに訳す。          ・「やは＝反語」の訳出に苦慮する。          ・「なん＝強意＋推量」の訳出に苦慮する。          ・「時の煙ともなりなん」の主語がつかめない。          ・「より＝即時」の訳出に苦慮する。</p>	<p>・「無常観」について、簡潔に説明する。          ・文構造を板書し、適切な訳ができるよう助言する。(文脈上、この解釈が適切であることを、後述する)          ・「唐の、大和の」が「調度ども」を修飾していることを指摘する。          ・第4段落の「かは」と一緒に反語の用法であることを確認する。          ・完了の助動詞「ぬ」の用法を確認する。(助動詞「つ」と併記して板書。更に、「完了＋過去」の用法と対比して整理するよう促す。          ・「また」という接続詞に留意し、家と人との関わりで、視点が「人」から別のもの(「家」)に推移していることを指摘する。          ・古文特有の「より」の用法を確認させる。</p>
<p>・作者の基本的な人生観(無常観)について文中の語句から確認する。          ・作者の興味が、無常観に拘束されることなく、世間へと開かれていることを理解する。          ・「心にくき」家と「わびしき」家の相違を整理する。          ・作者の美意識と人間観を確認する。          ・次時の確認をする</p>	<p>・「仮の宿り」が人生観に裏付けられた表現であることに気づかない。          ・キーワードを適切に拾うことができない。</p>	<p>・第1段落「仮の宿り」に着目させる。          ・「仮の宿りとは思へど、興あるものなれ」で、逆接の接続助詞「ど」を用いることで、二種の価値観が併存していることを指摘する。          ・第2段落と第3段落とが対比関係にあることを指摘する。          ・対照となる語句を列記し関係性を明確にする。(板書案参照)          ・作者の古代貴族社会への憧憬について、補足説明をする。          ・家屋の有り様と住人の人柄との相関に着目した作者の視点の独自性を指摘する。</p>

- (1) 主眼・ねらい  
「家居のつきづきしく」第4段落を読んで、西行と作者との対応の差異を理解し、作者の人間観について考察する。
- (2) 準備  
「家居のつきづきしく」を音読し、事前学習ワークシートを活用し、第4段落を現代語訳して授業に臨むよう指示しておく。
- (3) 学習課程

学習内容・学習活動	予想される学習者の反応	教師の支援
第1～3段落の内容を確認する。(前時の復習)		
<p>第4段落を現代語訳する。</p> <p>ア 敬語の用法に留意した訳を心がけ、敬意の方向を確認する。</p>	<ul style="list-style-type: none"> <li>・「ん = 仮定」の訳出に苦慮する。</li> <li>・「かは = 反語」の訳出に苦慮する。</li> <li>・「いみじ」を文脈に即して解釈することができない。</li> <li>・敬語に対する理解が曖昧なため、敬意の方向が的確に答えられない。特に丁寧の補助動詞は、第4段落から唐突に使われているため、戸惑いを感じてしまう。</li> </ul>	<ul style="list-style-type: none"> <li>・推量の助動詞「ん」の用法を整理する。</li> <li>・第3段落の「やは」の用法と同じであることを再度確認する。</li> <li>・「いみじ」の語義を確認し、文脈によりプラス・マイナスの両義の訳が可能であることを指摘する。</li> <li>・敬語の種類と敬意の方向について、簡潔に整理する。</li> </ul>
<ul style="list-style-type: none"> <li>・西行と綾小路宮の逸話を作者がどのような経緯で知ったのかを確認する。</li> <li>・西行と作者の、家居と住人の関係に対する受け止め方の共通点を確認する。</li> <li>・西行と作者の、後徳大寺大臣と綾小路宮へのそれぞれの対応の違いを整理する。</li> </ul>	<ul style="list-style-type: none"> <li>・過去の助動詞の相違に気づかず、両者の逸話を同時代のものと見なしてしまう。</li> </ul>	<ul style="list-style-type: none"> <li>・過去の助動詞「き」「けり」の用法の違いを説明する。</li> <li>・西行の対応が、本文前半の作者の考え方と一致していることを指摘する。</li> <li>・「さばかりにこそ」と「いみじくこそ」の表現に着目させる。</li> <li>・西行が事象を見て、人物を即断したのに対し、作者は留保の余地を残し情報を収集していたことを理解させる。</li> </ul>
<ul style="list-style-type: none"> <li>・作者の人間観について考察する。</li> </ul>		<ul style="list-style-type: none"> <li>・ある事象から、その人物の人柄は推察できる。優れた観察眼を持ちながらも、より慎重に人物を見ていこうとする思慮深さが、作者の人間理解を深めていることを指摘する。</li> </ul>